２月号

昭和59年２月１日
編集／発行
岡崎市教育委員会

「あっ、あった。これがアセビの木だよ。」
「ほんとだ。この木が万葉にも詠まれたんだね。」
「ふうん、はじめて知った。」
樹間に立つ俳句や短歌に
ノートを手にした生徒の瞳は
大きく輝く。

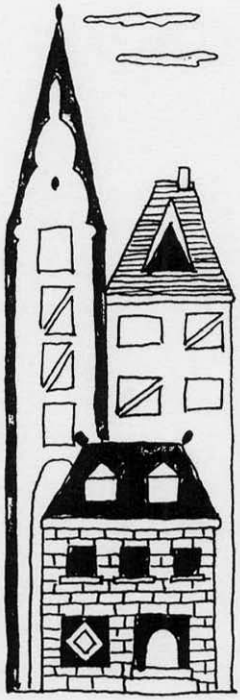
文学遊歩道は
学びの緑陰であり
散策と憩いの場である。
きょうもまた
生徒のはずんだ声が樹々を渡る。

（文学遊歩道―甲山中）

—教育随想—

今どきの子どもたちは…と言う前に

甲斐　浩



サンタのおじさん、今、何歳ですか？普段何をしていますか？どうして一晩で世界中が回れるの？男のくせして赤い服は恥ずかしくありませんか？ガールフレンドは何人？煙突の無い家に入る方法は？悪い子と良い子の分岐点は？夜中歩き回るので、お腹が空くでしょう。私のケーキを半分残して置きます。くれぐれも風邪を引かないように。でないと私の所に来てくれないと困りますから…

僕は絶対にサンタさんを信じません。もし本当に居るのなら、証拠を示して…

これは昨年行いました第十四回サンタの手紙運動に寄せられた、全国の子供たちからの手紙の抜粋です。

フィンランドの北部に、ロバニエミと言う人口三万の小都市があります。そして、その北方にコルバトントリという山岳地帯があり、普段サンタクロースはここに住んでおり、クリスマスが近づくとお供のこびとたちを引きつれて山を降り、ロバニエミ市の近くの森の中に在るサンタ村に入り、プレゼントの準備に忙しい毎日を送る……というお話が、古くから北欧に伝えられて来ました。一方、毎年クリスマスが近づくと、世界中の子供たちは、サンタ村にいる（？）サンタさんあてに近況を尋ねる手紙を出して置くと、イブまでには、それぞれの子供たちの手許に、サンタのサイン入りで、返事が届きます。（もっとも、世界中からですので、返事を直筆？ではなく、印刷であるのはちょっと残念ですが…。）この運動を始めたのは、昭和四十五年の事でした。

当時は、今から見れば、まだまだ人の心も今ほどには荒んでいませんでしたが、それでも恐ろしい時代への幕開けで、以来十有余年、世界も、社会も一向に好転する兆しが無い事は、誠に嘆かわしい限りです。すさまじい社会状勢、物価の値上がり、政治の混迷、こうしたひずみは、大きければ大きいほど、子供たちの心に、暗雲を投げかけずにはおきません。子供たちには、「子供たちの世界が絶対に必要です。」子供たちは、その中から温かい愛や、豊かな心、そして、無限の創造性を身につけてゆきます。昨今のように、心ならずも世の荒波を被り、舵を失った小舟のように、翻弄されかかっている子供たちを守っていくのは、私たち大人の義務であり、責任です。このような時代に心の中に夢を持って欲しいと願うのは無理な話ですが、でもせめてもの夢を描いて欲しいという願いを込めて始めたのが、この手紙運動であります。

今時の子供たちは……と言う前に、大人は今、子供たちのために何を教え、何を残せるか真剣に考えなければならない時に来ています。今までに約二十万人余の子供たちが、サンタの手紙運動に参加して来ました。そして、サンタの手紙を受け取ってさぞかしその小さな胸をときめかして来たことでしょう。それのみか、確かにサンタはいるんだという確信（？）を持ってくれたかと思うと嬉しくて、胸がどきどきします。

いずれ子供たちが成人した時、「昔サンタから手紙をもらったっけ…」と、苦笑まじりに想い出してくれたら、その人は、また、きっと次の世代の人たちのために、新しい夢を贈ってくれることでしょう。それがまた、私の夢でもあります。

（ユネスコ美術教育連盟理事長）

そっと窓を

矢作中学校長　鈴木和夫

掌に火種を吹き出し、新しく詰め込んだ煙管に先程の火種を探す父親の姿。俺も大きくなったらこの掌にと夢見たものだった。そのころ女性が煙草を吸うなんてことはごくごく例外のこと、花魁か置屋のやり手ばばぐらいのもの。ところが、このごろはごく普通の喫茶店で、娘さんがもうもうと煙を上げているではないか。

二十年余つきあった煙草を止めてもう十年になる。これといった理由はない。一服の後、鍬仕事を始める百姓が、「さてやるか」と呟く、その『さて』程度のきっかけである。止めてみて初めて、煙草吸いがどれほど人様に迷惑をかけているかということが分かった。昔の様に破れ障子ですき間だらけの家屋ならともかく、いずこも完全に密閉された部屋ばかり。全身ニコチン漬けとのつきあいは非常に辛抱のいる行である。『人の痛みが分かる』なんて綺麗事を言い慣れている私たち、案外自分の煙草には無頓着である。

気の弱い私は、煙草税を払ってない弱

八丁味噌づくり

黒田和男氏

八丁味噌は、その昔、戦国時代のころに早川久右衛門が矢作の大豆を使って仕込んだことに始まったといわれる。現在八丁味噌をつくっているのは、合資会社「八丁味噌」と合名会社「太田商店」の二軒だけである。

黒田さんは味噌づくり三十三年のベテランである。

「私が、小僧に入ったのは、昭和二十四年一月でした。当時、大豆は統制中で、味噌とたまりは配給でした。ですから、原料は丸大豆ではなく、大豆の油をとった脱脂大豆だったんです。八丁味噌の製造を再開したのは、統制解除になった昭和二十五年からでした。」

黒田さんの案内で工場を見学した。製造工程にはかなりの部分に機械が導入されている。大豆を洗ったり、蒸したり、味噌玉に麹菌をつけたりするのも機械である。

「確かに、コンピューターも使ったりしていますが、人間の勘というものがまだまだ大事ですね。麹菌をつくる時なんかそうです。そういうものは教えてもらったというよりも、盗み取ってきたというのですかね。常々、体で覚えてきたんです。」

八丁味噌は他のものと比べると、塩分や水分が少ない。また、桶に仕込んでねかせる期間が三年と長く、独特の風味を出している。

ねかせ倉には高さ六尺（約一・八メートル）の仕込み桶が並ぶ。

「今、五百本ほどの桶がありますが、大正十五年に作ったのが一番新しい桶です。桶師がいないんです。」

仕込み桶の上には円錐形に重石（おもし）が積まれている。

「最初は下に大きな石を置き、上にいくほど小さな石にして、ピラミッド型に積みます。全部で三トンあまりの重さになりますが、これがなかなか積めないんですね。これまで大きな地震があっても、決して崩れたことがありません。むしろ、全体が締まっていくようになっているんです。」

昨年は家康ブームと重なって、工場見学に訪れた人は約二万人。ますます八丁味噌の名は全国に広まっている。

「昔は、冬が一番忙しかったんです。ですから、冬だけ働きに来る人もいたんです。しかし、昭和二十七・八年ごろからは、年中同じペースでやっていかないと、出荷に追いつかないようになってきました。嬉しいことですが、一年中麹室の温度を調節しなければならないので気を使いますね。特に停電の時が一番困ります。」

社長室長の早川純次さんのお話では、社長さんも番頭さんも、工場のことは安心して黒田さんに任されているという。

（生年月日　昭和6・1・4
住　所　岡崎市八帖町字往還通六九
合資会社「八丁味噌」内）

喫煙の時と場所

河合中学校

本多光子

「どう、昨日も一日吸わなかった？」

「タバコの夢をみなかった？」

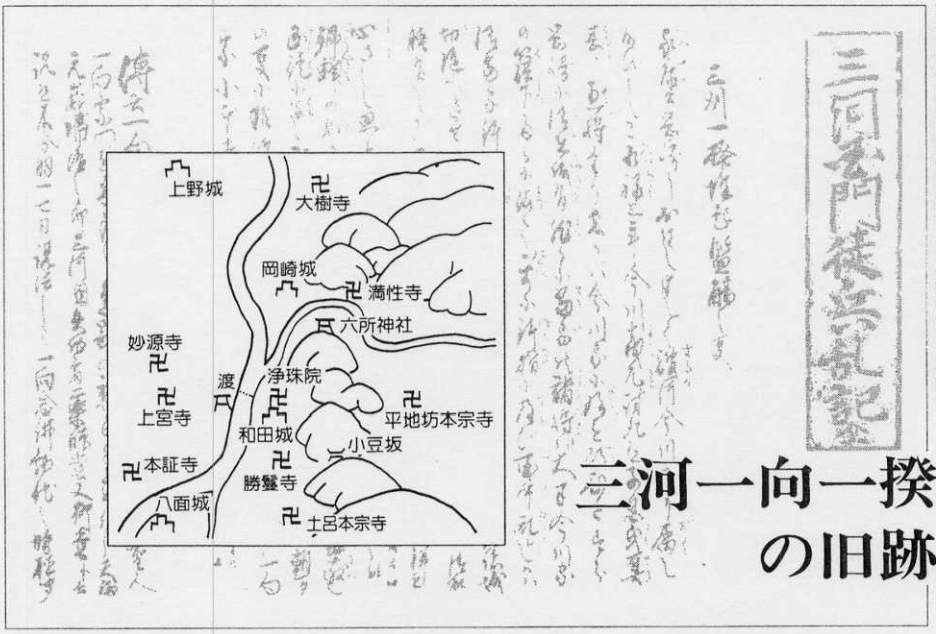
「もうがまんの限界じゃない？」

私の職場で禁煙宣言をされた人への毎朝の挨拶であった。宣言されて二か月、本人にとっては悪戦苦闘の連続だったと思うが、今では机上にタバコ盆の用意もされなくなった。

今日のようにタバコと健康障害の関連について取り沙汰されると、愛煙家の人も一度や二度は禁煙を決意した経験はあっても、実現は困難なようである。余程の強い意志と忍耐と努力が必要であろう。

喫煙が生活の中で唯一の憩いと楽しみであり、精神的ストレスの解消の最適な方法だと思っておられる人にとっては、禁煙は酷な話である。

授業後、疲れた後の一服という感じで遠くの山を見ながらプカプカ吸われているのは、見ていても感じがよい。しかし、長い会議などで、スパスパと矢継ぎ早に吸われるタバコの白い煙が部屋に充満したときは、息苦しくてたまらない。喫煙は、時と場所のエチケットを守り、自分の健康管理のできる人にしてもらいたい。みもあって、嫌煙権などと力む気はない。時々、立ち込めた煙の窓を、そっと開けさせてもらう失礼をお許し願いたい。



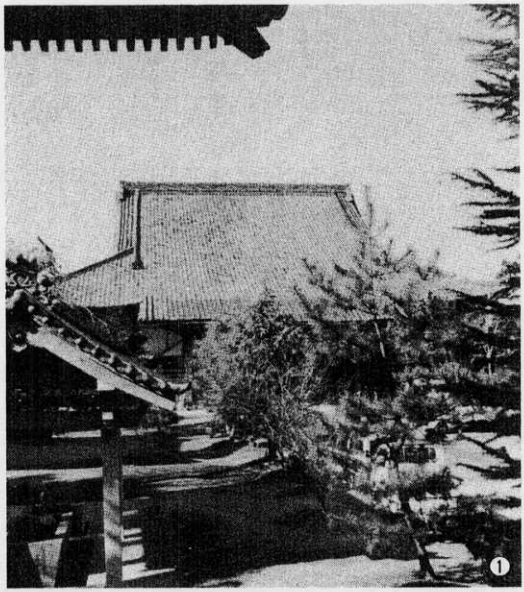
岡崎再見

㊺

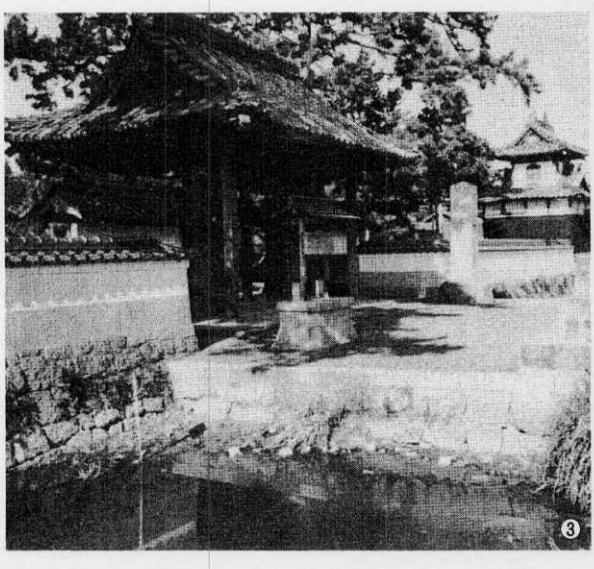
三河一向一揆の旧跡探訪

まだ元康と名乗っていた家康の、最も大きな試練の場となった三河一向一揆。領国統一のために威勢を示そうとする若き家康と、信仰のむしろ旗を掲げ守護不入の特権を守ろうとする一向信徒たちの血みどろの闘いは、永禄六年秋から七年二月末日にかけて展開され、今年で四二〇年目になる。冬休みの一日、一揆のてん末を記した「参州一向宗乱記」をたよりにその史跡を訪ねてみた。

一揆の中心となった本宗寺や三河三か寺は「前〳〵は野原也。道場を打破て野原にせよ。」と、一時はことごとく打ち壊されたというが、訪ねてみると、いずれも往時の威勢を偲ぶに足りる立派なたたずまいであった。また、この史実を後世に伝える碑も各所にあり、興味深かった。


①

②


③

事件のあらまし

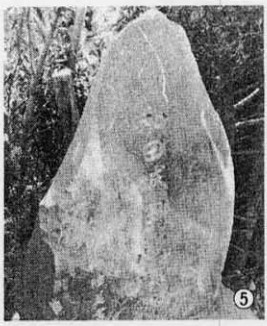
永禄六年(一五六三)十月●一揆の発端となる事件相次ぐ。同十一月～十二月●各地で局地戦起こる。

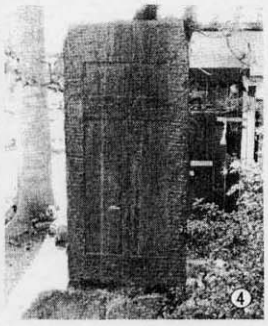
永禄七年(一五六四)一月十一日上和田の合戦で土屋長吉死。以降、中・下旬は佐々木・小川・小豆坂・生田原などで日夜激戦が続き、家康も度々窮地にたつ。

同二月八日●西尾城に兵糧を入れ、帰路八面城を攻略。このころより一揆の勢力弱まる。

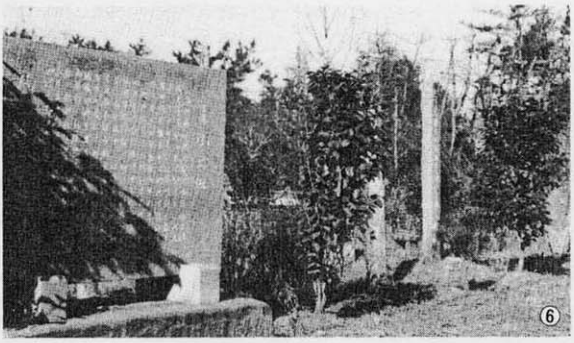
同二月二十八日●家康、浄珠院で赦免の誓書を書く。石川家成本宗寺に乗り込み、一揆鎮まる。

天正十一年大晦日●妙西尼あてに門徒の赦免状下る。


⑤


④

⑦


⑥

⑧

① 佐々木上宮寺―佐々木に砦を築いた菅沼藤十郎がここに兵糧を求めたことが事件の一端となったという。

② 針崎勝鬘寺―台地末端部にあり、三方が沼地であったという。鎗の蜂屋半之丞はここにたてこもった。

③ 野寺本証寺―周囲を水濠に囲まれた、城郭伽藍の代表的寺院。見張り楼を思わせる鼓楼が人目をひく。

④ 上和田の合戦で奮闘し、家康にみとられて死んだという土屋長吉の記念碑。宮地町比蘇天神社境内。

⑤ 常に合戦の最前線となった和田城の用心壕跡碑。野村さんが自宅の庭に私財を投じて建てたもの。

⑥ 「風やここらあたりが小豆坂」大先輩、故川島校長が建てた記念碑。この辺は度々合戦の舞台となった。

⑦ 上宮寺とは目と鼻の先の桑子妙源寺は家康側だった。柳堂は親鸞上人がここで説法したといい重文。墓地には立派な五輪塔が幾つも立ち並び目を見張る。

⑧ 上和田浄珠院―二月二十八日、家康がここでご赦免状をしたためたという。イチョウの老木がすばらしい。

⑨ 平地御坊本宗寺―土呂本宗寺が天正十一年、家康に許されて御堂を再建したという。当時光顔寺といった。

⑩ 本宗寺門前で旺盛を極めた土呂市も、元亀二年、家康の許しで再興された。砂川堤に今も三八の市がたつ。

⑩

⑨

教育日々

「ぼくのくろう」の指導から

六北小　野澤　裕子

わたしは最近学年会で、国語の教材研究で連日話し合いをする機会を得た。その結果、人物の気持ちや場面の情景を想像しながら読ませるためのさし絵作りや、劇化のためのお面作りをさせようということになった。

こうした背景もあって（先生たちの意気込みが通じたのか）どの学級の子供たちも真剣に学習に取り組むようになった。

私の学級の子供たちも、畑正憲さんとその家族や動物に興味を持ち、毎時間の国語の学習を楽しみにしていた。

今まで勉強嫌いだったMも、この単元に入ると、みんなと一緒に大きな声で本を読むようになり、発問に対しても強い反応を示すようになった。小がらす九郎の動作化では、真っ先に手をあげ、嬉しそうにお面をつけて演技した。

Yは、作者の生活に興味を持ち、本屋で『ムツゴロウの絵本』を見つけてきた。

「先生、ここに小がらすの九郎のことが載ってるよ。見て。」

「ぼく、この本難しい字がいっぱいあるので読めないけど、毎晩お母さんが少しずつ読んでくれてるよ。」

そう言って、嬉しそうに見せてくれた。私も子供たちに小がらす九郎の所を読み聞かせてやることにした。子供たちは、真剣な顔でまばたきもせず、目を輝かせて聞いていた。

放課になると『ムツゴロウの絵本』を奪い合うように持っていき、四、五人ずつ集まって読んでいた。そして、子供たちは、教科書ではまだつかみきれなかった畑さんの生活の様子、動物との心の触れ合いを知ることができた喜びでいっぱいだった。

この学習の終わりに、Oはこんな感想を書いてくれた。

> ぼくは、畑さんがいくら動物好きだといっても、からすと一緒に過ごして友だちになったなんて、最初読んだ時には信じられませんでした。でも、今ではどんな動物でも友だちになれるということがわかりました。

この単元を通して、教材研究というものが、子供たちの学習意欲に大きな影響を与えるのではないかとの反省を持った。

修学旅行記

男川小　内田　幹也

「ええっ！三十枚？そんなに書けるわけないじゃん!!」

教室中がどよめいた。

修学旅行から帰ったら、旅行記を書こうと出発前に話してあった。そのため、子供たちも覚悟はしていたようだが、四百字詰め原稿用紙三十枚という言葉に教室内は騒然となった。

ふだん、二、三枚の作文を書くだけで頭をかかえている彼らにとって、三十枚が途方もない量に思えたのも無理はない。そこで、なにも三十枚全部を言葉で書く必要はなく、カットや資料、調べてきたことなどを上手にまとめて旅行記にすることを伝えた。

「ぼくは、岡崎から京都までの駅名を調べたから、まずこれから書こう。」

とA君。まちがいがないか確かめるために、翌日、時刻表を持ってきた。

「ぼく、川を調べたで、教えてあげるわ。そのかわり、駅名を教えて。」

こんな情報交換があちこちで見られるようになった。

ふだんの授業では、優れた力を発揮しているB君は、勝手がわからず友だちの間を行ったり来たり。やがてイメージがわいてきたのか猛然と書き始めた。みんなが三時間かかって書いた量を、わずか一時間で書き上げてしまった。

初め、

「絶対に書けやへん！」

と力んでいた子供たちも、

「五枚書けた。」

「十枚書けた。」

思ったより枚数がはかどるので、

「先生、家でやってくるで、原稿用紙下さい。」

という子が日に日に増えてきた。

「なんとか三十枚は書けそう。」

という子から、

「三十枚で足りるかな。」

という子まで出てきた。

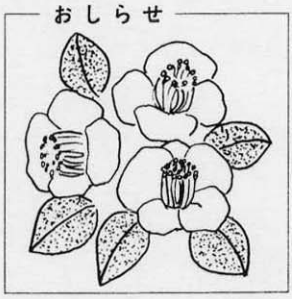
学期末の懇談会で、父兄が、

「よほど修学旅行が楽しかったのか、旅行のまとめを毎日家でやっていますよ。」

と話してくれた。

卒業を前に、何かまとまったものをと考え、教科の遅れを気にしながら始めた旅行記作り。これまでにない積極的な取り組みに、子どもたちの新しい一面を発見した。

おしらせ



第十回 冬季研修会終わる

二百二十七名が参加

第十回冬季研修会は、去る十二月二十五・二十六日、岡崎市少年自然の家で開かれた。

今年度の冬季研修会は、計画から運営に至るまで、すべて校長先生の手を離れ、高瀬昭三教諭（美川中）を委員長とする「冬季研修運営委員会」の手で行われた。

市内のほとんどの学校から参加者があり、その数も二二七名に達した。充実した講師陣のもとで、実り多い研修会であった。

講師と演題は次の通り。

○第一日

「くらしの中のことば」

東海学園女子短大教授

関山　和夫先生

「ことばの雑学」

NHKアナウンサー

小六　英介先生

「このごろ思うこと」

前岡崎市教育長

鈴村　正弘先生

○第二日

「空　海」

京都大学教授

上山　春平先生

「新美南吉」

大阪国際児童文学館専門員

鳥越　信先生

そのほか、神尾昌彦教諭（広幡小）石川昌宏教諭（男川小）の海外事情報告も行われた。

【寄贈刊行物・資料等】

◆教育機器を利用した矢北の授業

矢作北中学校

B5　五三ページ

◆機器利用英語教育研究発表要項

矢作北中学校

B5　二四八ページ

◆よくぞ立ち直ったこの子たち

竜海中　中島　泰

A5　七六ページ

◆心に残る板書のあり方

大門小学校

変型B5　一八三ページ

◆児童詩の創作と鑑賞の指導

福岡小学校

A5　八三ページ

ふるさとシリーズ

第二集「ふるさとの山河」近日刊行

校歌に歌い継がれ、人々に語り継がれてきた、あの山の昔、この川の今――『ふるさとの山河』（B5判二一五ページ）が、二月末刊行の運びとなった。

岡崎のふるさとシリーズ第二集として発刊（第一集は「ふるさとの自然」昭56刊行）されるもので、現在、最終の校正作業が、ふるさとの山河編集委員会（委員長、安藤幸夫校長）の手で進められている。

この書は、月報「岡崎の教育」に四年間にわたって掲載されたものを、全面的に加筆・修正・追加し、写真・地図も多数入れ、親しみやすい読みものにしたものである。

社会科の学習資料としても、遠足や家族のハイキングのガイドブックとしても好都合である。ふるさと岡崎を再認識するうえで、必携の書となることであろう。

■県自作TP入賞者

愛知県教育サービスセンターの主催する第十一回自作OHP―TPの作品募集に、岡崎市で入賞した作品五十九点を応募したところ、二十四点が入賞した。

▽特選

竹内順子（細川小）桜井公治（大樹寺小）川瀬哲夫（美川中）山田泉美（矢作中）

▽入選

三浦早苗（男川小）菅沼和子（細川小）彦坂はるみ（大樹寺小）岡本孝幸（大樹寺小）山田賛平（福岡中）杉山隆之（常磐中）内藤広光（矢作北中）後藤晶基（矢作北中）鈴木金利（梅園小）柴田輝夫（広幡小）清水真奈美、長神ゆかり（細川小）高橋啓三、東忠、吉田久子（大樹寺小）河上眞一（大門小）横井学（矢作北小）杉浦伸二（六ッ美南部小）高木和広（美川中）渡辺総意（矢作北中）

▽佳作

■中学校長距離継走大会

第三十二回愛知県中学校長距離継走大会は、去る十二月二十五日愛知青少年公園で、五十一チーム（男子）参加のもとで行われた。上位入賞校は次の通りであった。

四位　南　中学校

五位　城北中学校

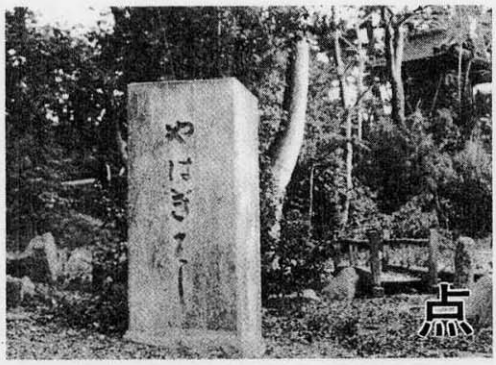
昭和59年度研究発表校の研究動向

校名	主題	予定日
奥殿小	自ら考え活動できる子の育成	6／12
矢南小	魅せられはたらきかける子の育成	6／19
六中	形成的評価をとり入れた授業設計と実践	6／26
福岡中	意欲をもって学ぶ生徒の育成	9／21
常東小	自ら考え行動する子どもの育成	9／28
南中	基本的生活態度を徹底し、活力ある生徒を育てる生徒指導※	10／16
山中小	確かな表現のできる子の育成	10／23
六名小	「道徳の時間」の研究※	10／30
矢西小	すすんで読み、解く子を育てる授業―構造と展開と―※	11／9
広幡小	ひとりひとりを伸ばす特活指導	11／16
恵田小		11／20

愛産研・愛家研・東数教（期日、会場未定）

※印は中間発表校

「やはぎばし」親柱



所在地―岡崎市矢作町

矢作神社境内の南端に、中央に池を配した小さな庭園がある。この入り口に二本の石柱がたっている。旧矢作橋の親柱（おやばし）の石であることが一目でわかる。「やはぎばし」とかな文字で書かれた方は約六〇センチ角で、一四〇センチほどの高さ。昭和二十六年、国道一号線の新設に伴ってとり壊された懐しい橋のたもとに建っていたものである。

ところで、もう一本は約四〇センチ角とやや細長く、明治二十三年八月、明治四十年桁上修理と刻まれており、明らかに前のものとは対でない。もう一代古い橋のものである。おのおのの対となる親柱はどこにあるのだろうか。

神社東の堤防上に、矢作川を詠んだ歌碑を始め、いろいろな碑がたっている所がある。そこで「大正二年九月竣工」と彫られた一本を見つけた。「やはぎばし」の対となる西たもとの親柱である。

残り五本のうち四本、東たもとの二対は、岡崎公園管理事務所の資材置き場に無雑作に寝かされていた。矢作橋は、今のもので十三代目という。残り一本の所在は不明である。

• カット　大門小　樋口文子

この本を

＊もう一つ別の生き方　木村　治美
集英社　280円

＊宝石は語る　砂川　一郎
岩波新書　430円

＊文明化した人間の八つの大罪　K・ローレンツ
思索社　1,300円

＊恐るべき子供の食卓　河野　友美
KK・ベストセラーズ　690円

＊序の舞　上・下　宮尾登美子
朝日新聞社　1,200円

＊23分間の奇跡　ジェームズ・クラベル
集英社　780円

＊親の子離れ子の親離れ　三浦雄一郎
シンコー・ミュージック　880円

＊おばあさんの薬箱　佐橋　慶
東京新聞出版局　850円

＊明日は何かを変えてみよう　中村　力
文化創作出版　750円

＊北海道の夜明け　小池　喜孝
国土社　1,200円

オアシス

「おには外、ふくは内。先生のおなかの中のおに、出て行け」と封筒に書かれ、豆が同封されていたY子の手紙を思い出す。当時胆のう炎で入院中であった私はじいんと来た。その時小一であったY子が結婚するという。新家庭の鬼も一掃するであろうY子、先生はその後ずっと元気だよ！

「知らない」ということは、大変恐ろしいことである。

先日、月報の取材で、三河一向一揆に関する寺を廻った。

ほとんど知っているつもりでいたが「上和田浄珠院」「比蘇天神社の土屋長吉碑」等……。いつも車で通りすぎていた。恥ずかしい。

朝起きるのがたいへんつらいこのごろ。あと十分、あと五分と、ぎりぎりまでふとんにへばりつく。ねむい、寒い。

ああ、もう時間。あわてて家を飛び出して、学校へ。昨夜の仕事はきつかった。朝飯を満足にとらずに出てきたむくいで、腹がへって仕方がない。

あとの後悔、先に立たず。

ストーブ談議で何を話すか…、進まない教材を、どうして効率をあげてこなそうか。

すさんだ生徒の心を、どうして和らげ、やる気を取り戻させようか。

すばらしい、そして、心に残る卒業式をどうやって効果的に演出しようか。

すでに立春、学年末は間近。